

# 学習に感動させる工夫

—— 一人一人の学習意欲を高めるための支援と評価 ——

足利市立東小学校 中村 真一（研究主任） 亀田 通  
柏瀬 順一 加藤 貴子 大浦 玲子  
原 あや子 久保田伸之 辻 乃夫子

## 1. 主題設定の理由

今の社会は変化の激しい社会であり、これは、今後益々その傾向が強くなるものと予想される。このような社会において、人間的に豊かな生活を送るためには、生涯学び続けなければならないと考える。

本校の教育は、児童がこれからの社会において、人間的に豊かな生活を送ることができることをめざして、次の目標を設定している。それは、学ぶ心（自学自習、自主独立）、愛の心（惜愛）、健やかな心（優しさと逞しさ）である。

生涯学習の時代を視野にいれた時、どうしても自学自習の精神、つまり、自主的、主体的に学ぶ意欲的な姿勢態度が要求される。これは、貪欲に知識を詰め込むという知識偏重を意味するのではなく、自ら目の前に存在する諸々の課題に立ち向かい、それらを自ら解決していくという能力・関心・態度を十分に育成することが肝要ということである。

このような能力・関心・態度を育成するためには、日々の学校生活における児童の学習活動はどうあるべきか、教師は授業という意図的教育活動をどう進めたらよいか等、再考せざるを得ない。

本校では、児童育成のため、次のことを教育活動の基本としている。

- ① 児童と教師の望ましい人間関係がすべての教育活動（学習活動）の前提条件である。
- ② 常に、具体的な児童一人一人に着目し、児童主役の教育活動を推進する。
- ③ 率先垂範、感動を重視し感化教育（共育）に努める。

これらを、日々の教育活動の中で念頭におき教育実践に努めている。児童の成長は、学校生活のすべての活動場面において期待できるものである。しかし、その成長は教師の教育の本質の把握や方法により期待度が変わる。児童の成長はその内面（情意面）に強くかかわりをもった時、より期待できる。従って、児童の内面をよく見据えた教育でなければならないと考える。

そこで、本校では、児童のより大きな成長のため、内面に視点をあてた教育を重視している。児童が学習過程において、喜び、驚き、疑問等を感じる教育である。学習する中で児童が、心から喜んだり、驚いたり、なぜなのかという疑問を抱くなどして、さらに学習しようとする意欲をもち、次の学習につなげるような過程である。この行為行動が児童の成長をより促すものであり、この感動のある行為行動を本校では重視している。

このような理由から、児童の感動を成長の大きな原動力ととらえ、「学習に感動させる工夫」を本校の研究主題として設定した。これは、児童の学校生活全般においてめざす主題であることはいうまでもないことではあるが、ここでは書写指導に焦点をあてた実践研究について述べたい。

書写指導は、ややもすると、技能面のみの指導に陥りやすく、ただお手本通りに練習すればよいという、児童にとって無味乾燥な学習になりがちである。このような問題点を反省し、児童が学習に感動し、一人一人が主体的に取り組むよう支援・評価の工夫を実践研究していきたい。

書写指導の実践研究をすすめる上で、個に着目し、児童一人一人の成長を考えた時、教師の児童に対する支援と評価が大きな課題となってくる。個を生かすための個に応じた支援と評価である。そこで、児童の実態をふまえ、サブテーマを「一人一人の学習意欲を高めるための支援と評価」とし、児童一人一人を生かす支援と評価に焦点をあて研究していくことにした。

## 2. 研究の実際

### (1) 基本的な考え方

#### ア 楽しい学校・楽しい授業をめざして

児童が主役の学校、これは別の言い方をすれば児童にとって楽しい学校ということである。

児童の学校生活の大部分を占める学習活動は授業である。従って、児童にとって楽しい学校にするためには、楽しい授業をしなければならない。児童は本来、自分でものごとに疑問をもち、自分でそれをいろいろ調べ、自分からやってみようとする意欲や積極性をもっている。これらが実現できた時、つまり、分かった、できた、自分の心で決めたなどの喜び、感動が体験できた時、楽しい授業を実感するものと考えられる。学び続けることの喜び、楽しさを一人一人が実践し続ける学校、学級の児童集団づくりをめざしたい。

#### イ 児童の感動のとらえ方と基本的な学習過程

楽しい授業、これを、児童の具体的な学習の行為行動から捉えると次のような時、児童は楽しいと感じ、学習効果がより大きいと本校では考えている。それは、「学習して分かった喜び」「学習してできた喜び」「学習の中で自分で心を決める喜び」を感じた時である。

この分かった喜び、できた喜び、心を決める喜びを本校では感動ととらえている。この感動が児童に対し学習したことの満足感、充実感をもたせ、次の学習意欲を喚起し、学び続けることの喜びを与えるものと確信している。そのため、課題解決の学習が効果的ととらえ、本校では、次の3つ段階を児童の「学習過程」、特に、書写指導の基本型として授業を展開している。

(ア) 『つかむ』段階 児童が教師の助言のもと本時の課題をつかむ段階

(イ) 『すすめる』段階 児童が自分の課題にむかって学習をすすめる段階

(ウ) 『たしかめる』段階 児童が自己評価等をし、確かめ、まとめる段階

その際、教師として次のことを、指導過程上留意することになっている。

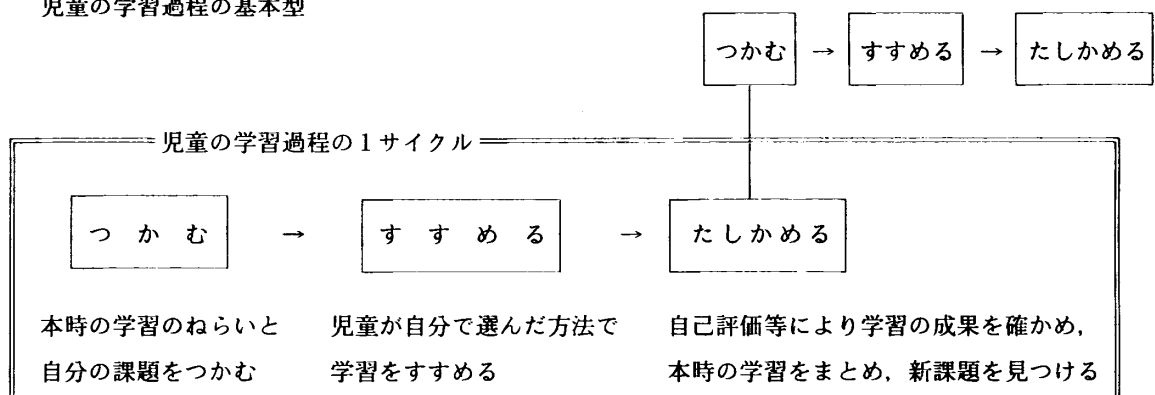
(ア) 本時のねらいに照らし自分の課題はなにか、児童自ら具体的につかませるようにする。

(イ) その課題解決のため、自分自身にあった解決策を見つけさせ、自分の力で解決させるよう教師は支援する。

(ウ) 学習の成果を確かめるための自己評価をさせ、新たな課題も見つけさせる。

教師は、児童個々の学習活動が効果的にすすむために、適切な支援に努めることはいうまでもないことであるが、一人一人の実態の把握を重視する。

#### 児童の学習過程の基本型



ウ 個を生かす評価

個を生かす評価をするために、本校では次のことを基本的にふまえている。

(ア) 児童にはそれぞれ引き出すことのできるさまざまな資質や能力がそなわっている。いろいろなことに関心をもってかかわる意欲や、自分の課題を見つけ解決しようとしたり、実現しようと考えたり、判断したりする資質や能力である。これらの資質や能力を「児童のよさ」ととらえる。このような児童のよさは、特に、自主的、主体的な学習活動において発揮されるものであり、そのような時、そのよさはより伸長されるものと考ええる。

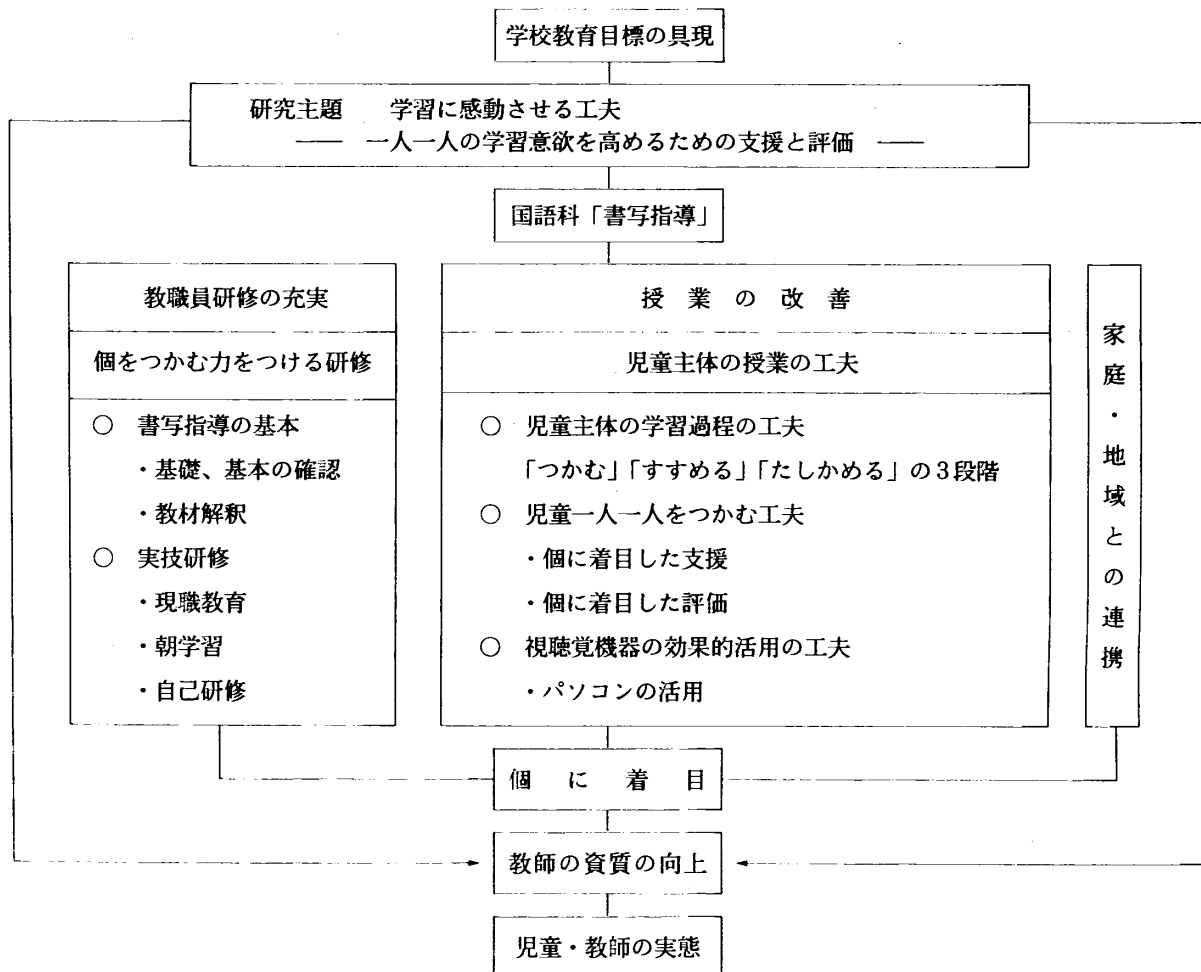
従って、教師は、児童の学習活動をいかにしたらよいか、より工夫することが必要であり、児童のよさを的確につかむことが大切である。

(イ) 評価は児童一人一人に学習の楽しさを感じさせ、より成長させるためのものであることを再確認する。一人一人の児童のよさをよく把握し、その個にあった評価をしたい。従って、評価の物差し（評価基準）は児童個々異なってくる。

教師の児童に対する評価は、児童の意欲、能力伸長のための支援でもあり、教師の自己評価でもある。児童の自己評価は、学習の達成感を味わい、児童自身がより伸びようとする意欲等にもかかわるものである。

本校では、特に、児童自身が自分のよさや学習の成果をつかむための自己評価を重視している。

(2) 研究 構 想



### (3) 毛筆実技研修

授業が常に、教師と児童との信頼関係の上に成り立っているとすれば、「児童に感動をもたせる。」ためには、まず教師が書写学習の内容に感動しなければならない。教師が変わろうとすると同時に児童も変わるという考えのもと書写（毛筆）の実技研修を行っている。

内容は、書に関する基本を身に付ける研修と書写の時間（授業）の指導法の研修を取り上げ実践している。前者は現職教育の時間を主に、後者は「朝学習」という本校独自の自主研修時に行っている。

#### ア 現職教育の内容

- ・「永字八法」を通しての基礎的な筆づかい 8月24日
- ・「かな文字」の基本 9月13日

#### イ 朝学習の内容 - 毎月第1, 3土曜日7時から8時まで、自主参加

- ・第1回 3年の毛筆 - 毛筆の導入
- ・第2回 3年の毛筆 - 始筆・送筆・終筆「一」
- ・第3回 6年の毛筆 - 行の中心「南風」
- ・第4回 3年の毛筆 - たて線の入れ方と止め方
- ・第5回 3年の毛筆 - かな文字
- ・第6回 3年の毛筆 - はらいについて
- ・第7回 3, 5年の毛筆 - おれとまがり 筆順「ビル」「世界」
- ・第8回 3年の毛筆 - はねと画の長短「子牛」
- ・第9回 4年の毛筆 - 筆順「左右」
- ・第10回 かな文字の基本
- ・第11回 3年の毛筆一点画の長短と方向「冬山」

第11回  
東校朝の学習会

書写実技研修

日時 12月2日(土)  
午前7時より

場所 第2会議室

内容 3年の毛筆 その6  
点画の長短と方向「冬山」

The poster features a decorative border with a small illustration of a person writing at a desk in the top right corner and a stylized floral design on the left side. The text is arranged in a clear, organized manner, with the title '書写実技研修' (Calligraphy Practical Training) prominently displayed in a decorative oval.

書写指導に限らないことではあるが、「学び続ける者のみが教える資格あり。」といわれるように、児童の力を伸ばすためには、教師自身が更に力をつけることが必要である。教師が力をつけることは、単に毛筆が上達するというだけでなく、児童の小さなよさを見つけたり、児童の小さな変化を即、とらえることができたりもするようになるのである。教師が自ら筆を持つことにより、児童の学習をより具体的により深く見る力をもつことができるようになるわけである。

### (4) 指導法の工夫

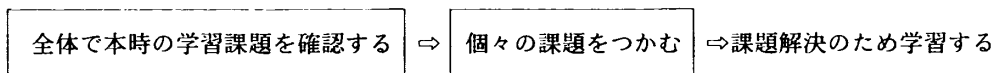
授業を成立させるためには、児童の学習意欲と大きなかわりがある。その学習意欲を高めるには、教師の授業に対する諸々の準備が大切であることはいままでもないが、児童への教師の支援と評価が鍵をにぎるといっても過言ではないととらえる。児童個々を生かす支援と評価である。支援重視は「学習は児童主体でなければならない。」が所以である。児童の主体的学習を目指すためには、教師は主でなく従であるべきである。児童の学習意欲は、より高まれば高まるほど、より継続的であればあるほど望ましいものである。それは、児童主体の授業であってこそ期待できるものであるととらえている。

以下、特に支援と評価という視点から、指導法の実践工夫例をあげてみる。

## ア 児童の学習過程上の支援と評価

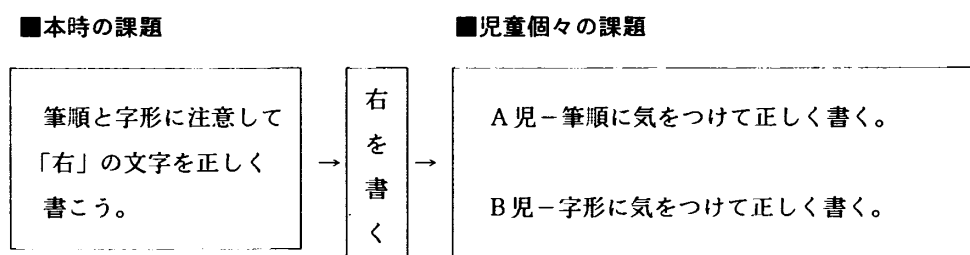
### ㉞ 「つかむ」段階

児童が本時の学習の課題を自らつかむ学習段階である。児童は次の流れで学習する。



児童は本時の学習の課題（ねらい）を全体で確認し、そのねらいをふまえ、自分自身の課題をつかむ。教師は、まずこの児童個々の課題の違いを押さえる。このことが、1単位時間の授業の中での児童個々を生かす支援と評価のスタートである。

授業実践から例をあげると 次のように全体の課題と個々の課題とが異なってくるのである。



本時の学習のねらいを確認し、児童が実際に「右」という字を書き（試書）、その試書から児童は自分自身の課題をつかむ。

教師は、この児童個々の課題解決のために支援をしていくことになるし、学習途中でこの個々の課題をふまえ評価をしていくことになる。児童にとってみればこの課題が解決できた時（あるいはそれに近い状態）に喜び（本校でとらえる感動）を体感するのである。

この段階の留意点として次のことがあげられる。

- ・ 児童自ら、自分の課題をつかめるよう適切な資料を準備しておく。
- ・ 児童個々の課題を、机間指導等できめ細かく把握すること。
- ・ 児童の最初の作品（試書）を大切に扱うよう指導しておくこと。あとで児童個々の伸び（学習の成果）がわかる。
- ・ 教師は、児童のつまずき（個の課題）を予想できるよう事前の教材研究（教材解釈）が大切である。それができればできるほど個を生かす適切な支援や評価ができるわけである。

### ㉟ 「すすめる」段階

児童が自分の課題に向かって学習をすすめる段階である。次のことがこの段階では大切である。

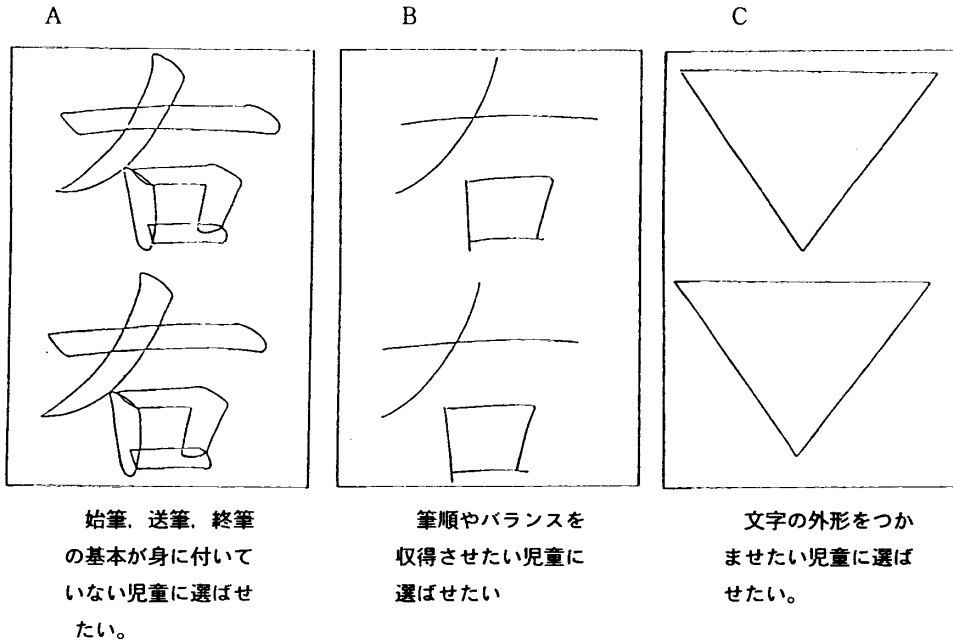
- ・ この段階の学習は個別学習が主であり、教師の計画的な机間指導が児童の変容のために大きなポイントとなる。児童に対する支援の重要な時と場である。
- ・ 課題解決に適した学習方法を児童が選択できるよう教材、教具や場を設定しておく。
- ・ 自己評価を取り入れ、自分の課題解決に向かって学習をすすめるように支援する。
- ・ 児童個々の進捗状況に合わせ支援することに重点をおき、指導過剰にならないようにし、児童それぞれの変容の把握に努める。
- ・ 時には、児童同士の相互評価を取り入れ、他の児童のよい点を見つけ参考にさせる。
- ・ 児童の活動時間を十分確保しておくこと。

—実践工夫例—

(a) 作業用紙の工夫例

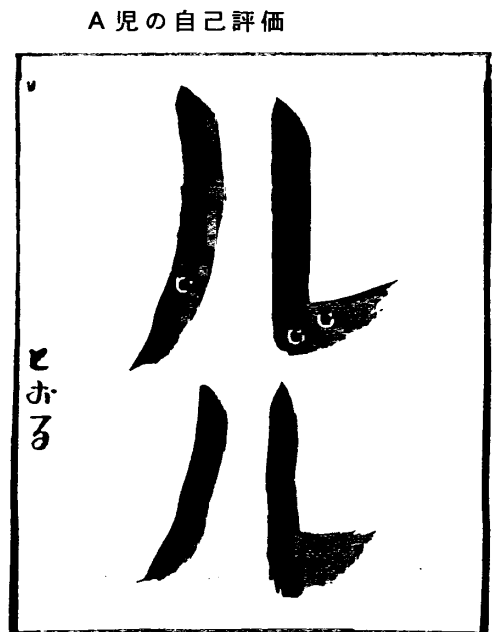
児童個々がそれぞれの課題に向かう時、その解決のためには教師の支援が必要となる。作業用紙は児童への支援の効果的な一つである。作業用紙は1種類ではなく、児童が自分の課題解決のために自ら選択できるよう2種類以上を準備することが望ましいと考える。

次の資料は「右」の文字を筆順と字形に注意して、児童に練習させるためのものである。児童に自由に選択させ活用させた。



(b) 「すすめる」段階での自己評価の工夫例

この段階でも評価は必要である。自分の課題にどの程度迫れたか、学習の途中で確かめることが必要である。右の作品は、自分の課題（おれと曲がりの区別をはっきりして書く。）をふまえ、自分の作品のどこが変わったか自己評価させたものである。そのよいところに「シール」(右の作品の○の部分)を貼り、自分の課題解決の様子を確かめるわけである。このA児は、自分の作品の中で「曲がり」と「おれ」を区別して書けるようになったと自己評価している。つまり、「シール」を貼ることにより、自分の課題（めあて）を明確にしながら学習をすすめることができるのである。



㊦ 「たしかめる」段階

学習してきたことを自己評価等により確かめ、本時の学習をまとめる段階である。また、新たな課題や残された課題に気づき次の学習につなげる段階でもある。ここでは、パソコン活用による評価について実践例をあげてみる。

「月」を形（外形）を考えて正しく書くことが学習課題の教材である。主な授業の流れは次のようである。

- ・ 事前に、児童が書いた文字をスキャナでパソコンに入力して、フロッピーデスクに保存しておく。
- ・ 授業フロッピーデスクから自分の文字を呼び出す。
- ・ 文字を四角形で囲んで外形を確かめておく。
- ・ その四角形を拡大、縮小して正方形や長方形の変形し、「月」にふさわしいと思う外形を探す。
- ・ ふさわしい四角形の練習用紙で練習し、その後、清書する。
- ・ 特に、変容の見られた児童の作品をスキャナを使い、パソコンの画面に映し出す。

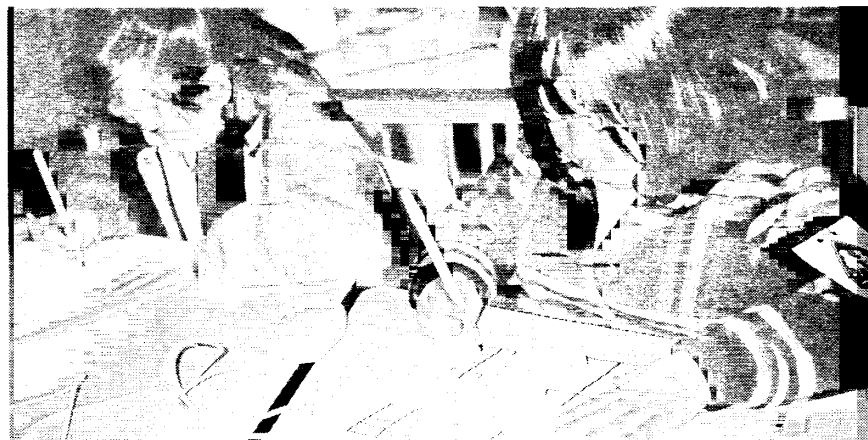


事前に書いた字の横に清書すると、その児童の変容をよく把握できる。そこで、パソコンでも2つの文字をスキャナで取り込んで、その画面上で左右に並べ、それぞれの文字を四角形で囲んでみる。すると事前の字（正方形）と清書の字（長方形）の外形を同じ画面で比較することができる。

文字の大きさが違っていても、縮小、拡大の機能を使い見やすい大きさに変えることができる。

また、整っていない文字でも、その一部を伸縮させる変形の機能を使うことにより、整った文字に修正することができ、自分の字を生かすこともできる。

このようにパソコンの活用により、自分の字の外形を瞬時に確認、修正することができ、低学年でも自己評価したり、自分の課題をつかむことが容易に行える。



### 3. ま と め

研究の成果と課題をまとめるにはまだまだ研究不足ではあるが、これまで全職員で実践を通してすすめてきた研究を振り返り、次年度の研究につなげるために、一応まとめることにした。

- (1) 「児童主体の授業を」と今まで考え授業を展開してきたが、どうしても教師主体になりがちであったことは否めない。この実践研究を通して「児童主体の授業」のむずかしさが分かってきた。個を生かすための支援、評価の意義、児童一人一人を本当に大切にすることの必要性、児童を育てることとは教師自身が学ぶこと等々が分かりかけてきたことが大きな収穫である。
- (2) 上記したことと関連することであるが、我々教師の児童を見る目が変わってきた。児童を育てるには児童のよさをつかむことが大切である。教師が児童の小さなよさや変容を見落とさないよう日々の生活（授業が主）の中で気をつけるようになってきたのである。だが、一人一人を真によく見据えることは大変難しいことである。より研鑽を積んでいき児童をみる・つかむ確かな目をつけていきたい。
- (3) 児童の書写の時間に対する自己評価（意識）が変わってきた。楽しいと評価する児童がふえてきたのである。個に着目し、よさの把握に努め、児童の感動を重視した授業実践の結果ととらえている。
- (4) 個々へのその場その場での適切な支援、個に応じた個を生かす評価を主に研究を進めてきたが、教材研究（教材解釈）の甘さ、評価基準の設定（きめ細かな評価基準）、教師自身の書写（毛筆）の基本の習得等まだまだ課題は多く残っている。今後も実践を通して一つ一つの課題を明らかにしていきたいと考えている。
- (5) 研修のねらいが明確になったためか、教師自身筆を持つことが以前よりは抵抗感が少なくなってきた。児童の成長を望むならば、教師もより成長することが必要と自分自身に言い聞かせるようになってきた。学び手（共育者）として今後も進んで研修に励んでいきたい。



## 評

多様化し激しく変化している現代社会において、次代に生きる子供たちには、この社会の変化に主体的に対応できる能力が要求されています。そこで、生涯にわたる学習の基礎を培うという観点に立って自ら学ぶ意欲を育むことが極めて重要なこととなります。

そのためには、学習指導において、一人一人に着目し、よさや可能性を引き出し生かしながら、学ぶ楽しさや成就感を体験させ、学習意欲を高める支援と評価をすることは大切なことです。

本研究は、このような課題を受けての研究実践であり、次のような特色がみられます。

- 1 「つかむ」段階、「すすめる」段階、「たしかめる」段階の3つの段階を児童の「学習過程」としてとらえ、各段階における教師としての指導過程上の留意することを明らかにして、児童主体の授業の展開に努められました。特に、「すすめる」段階では、作業用紙の工夫や自己評価の工夫に努め、「たしかめる」段階では、パソコンを活用した研究実践をされました。
- 2 児童自身が自分のよさや学習の成果をつかむための自己評価を重視し、児童一人一人をとらえる工夫に努められました。
- 3 教師が変わろうとするところに児童も変わるという考えのもと、現職教育の時間では書に関する基本を身につける研修に、また朝の学習という自主研修の時間では、書写の時間の指導法についての研修に取り組み、個をつかむ力をつけるための研修に努められました。

このように、教師自らが筆を持つことにより、児童の学習をより具体的に、より深く見る力をつけることができるという考えに立った本研究は、大いに参考になるものと思われまます。先生方のご努力に感謝申し上げます。今後とも研究を継続され、実践を積み重ねて更に研究が深められることを期待します。